

みんがひろくろう民放史

題字 中川 順

ラジオ関東ナイター中継

— 今だから言えるあの時 —

故 松澤 壽雄 (RF 元運動部長)



◆横浜にラジオ局誕生

昭和33年2月24日、横浜に京浜地区の民放局としては5番目に開局したラジオ関東は、出力1キロワットのローカル局とはいえず、ニークな編成とバタ〜くさい内容が聴取者の期待を集めてスタートした。

音楽、スポーツ、ニュースを3本柱として、NHKや既存民放局の型にはまった編成とは異なり、地元の情報を中心に小回りのきく番組が話題を呼んだ。

船の汽笛をテーマ音楽のバックに乗せて、ケン田島さんが流暢な英語で語りかける『ポートジョッキ』は、いかにも港ヨコハマの雰囲気漂わせたラジオ関東の名物番組として、今でも思い出される方も多いと思う。

◆延長戦も最後まで

そして中波ラジオとしては画期的な編成で、既存の民放局を悔しがらせたのが、プロ野球ナイターの連夜にわたる中継、しかも試合開始から終了迄の完全中継である。それまでは日本短波放送が昭和

31年よりナイターを連夜中継していたが、短波という受信上のハンディがあつて、いまひとつ話題性に欠けていた。

そこへ出力1キロワットとはいえ中波ラジオが月曜日から日曜日まで、プロ野球ナイターを編成、試合開始から終了まで放送し始めた。さらに「延長戦も最後まで」という文字通りの完全中継であつたため、大いに注目を集めたわけである。

それまでのナイター中継は既存民放局が、週2、3回放送していたが、時間枠は殆どが夜7時頃から9時頃までで、試合が長引けばどうしても尻切れトンボになるのは避けられない状況であつた。

ところがラジオ関東は試合がどんなに長引こうとも、決着がつくまでは中継をするという心意気。各局は試合がどんなに白熱していても9時ごろになると「試合の途中で残念ですが、この辺で〇〇球場からお別れします」というアナウンスを最後に次々と中継を終わってしまう。それから先はラジオ関東の独壇場、現場スタッフは一種の快感を味わいながら中継を続けたものである。

◆営業部の嘆き

たった一局の中継となつて聴取率が鰻のぼりになるのはいいのだが、ナイターの後続番組が次々と飛ばされるわけであるから、営業部は真っ青、いつもその翌日になると、西村営業部長(故人)が渋い顔で運動部へやって来て、ひとくさり愚痴をこぼしていく。

「ナイターもいいけど、飛ばされ



今はなつかしい後楽園球場のスコアボード

たスポンサーのことも少しは考えて欲しいぜ。毎日毎日謝るばかりで営業部員は泣いているのだから……」

そうぼやかれても、運動部としてはどうしようもない訳で、何とかないで、何とかなだめるのが精一杯。

普通中継が延長されて、後続のスポンサー番組を飛ばす場合のコメントは「スポンサーのご好意により……」とコメントすることになっていた。これは当時の若宮常務・編成局長(故人)の意見でそうなったのであるが、

「スポンサーにしてみれば、折角時間枠をとって提供している番組が否応なしに飛ばされるのだから、好意など持つ筈がない。とにかくラジオ関東のナイター完全中継に協力して頂かなければいけないの

であるから、ご協力という方が適切なのではないかと、いささかこじつけに近い言い訳でもあったようだ。

我々スタッフもそうそういい気にはかりなつていた訳ではなかった。試合が長引きワンサイドゲームにでもなるものなら、それこそウンザリしていたものだ。

近頃の民放ラジオのナイター中継では試合終了まで放送するのが当たり前とされているが、当時は大変なことだったのである。編成局長と営業局長との意見衝突はしばしばであったようだが。試合終了まで放送すると言う基本方針をガンとして譲らず、完全中継の意思を貫いた若宮編成局長の信念は敬服の至りであったが、一方よくそれに耐えてスポンサーとのトラブルもなくナイター中継を看板番組として支えてくれた営業局の方々も大変だったろうと、今頃になつてその苦労がわかるような気がする。

◆初めて途中打ち切りに

延長戦も最後までを合言葉に快調な滑り出しでスタートしたナイター中継であったが、3年目に

して遂に途中で打ち切らざるを得ない事件が発生した。



開局当時のラジオ関東本社社屋

昭和36年9月7日、後楽園球場での巨人・国鉄22回戦でのことだ。2対2で迎えた延長11回表、国鉄土屋選手が三・本間に挟まれた時、巨人藤尾捕手のタッチを避けようとして巨人長嶋選手と衝突、これが走塁妨害かどうかで大モメとなった。苛立ったファンがグラウンドに物を投げ込んだり、スタンドで火を燃やすなどして球場全体が騒然となり、遂に機動隊200人が出動して騒ぎを抑える有様、10時ちよつと過ぎに始まった抗議は延々と続いていた。

現場では始めのうちこそ普通の

抗議のつもりでとにかく中継を続けていたが、どうも様子が尋常ではない。いかに処理すべきか編成、営業両デスクと検討したが、営業は11時20分からの『ポトジョッキー』はスポンサーの了解をとってないで中止するわけにはいかないと強硬に主張、自宅に居られる若宮編成局長の判断を仰いだ結果「これはもはや野球中継ではない。騒擾事件であるから、途中打ち切りもやむを得ない」ということで、ついに11時20分で中継を打ち切った。途中で打ち切るにあたり、もはや野球とはいえない旨お断りコメントを繰り返したが、納まらないのは熱心な聴取者、たちまち社内の電話は抗議や文句、いやみ、脅かしなどでパンク寸前、ベルは鳴りっぱなし、とても対応しきれない状態になった。

「ラジオ関東は延長戦も最後まで放送するのではないのか……ウソつくな、テメーなんてえ名前だ。明日社長にはなしをして貴様をくびにしてやる……」

「お前、このあと会社を出てみる、ただじやすまないぞ、ぶっ殺してやるからナ」

「今から火をつけに行くから待つ

てろ……」

なんとも物騒な内容の電話を受けた運動部や編成部のスタッフはウンザリしながらも、もしやという恐怖から、とても一人では帰れなかったそうである。

試合は約2時間後の翌日0時8分に再開されたが、2日に跨った史上稀にみる出来事であった。

◆初ナイター中継の内緒話

話は昭和34年に戻るが、初のナイター中継はアナウンサー泣かせの長丁場で苦勞した。

当時は、ゴールデンウィークまではほとんどデーゲームであった。しかし西鉄は5月3日(祭日)に大毎とのダブルヘッドを組み、第一試合は夕方5時にプレーボールというスケジュールであった。

初のナイター中継でもあるし、私と窪田チーフアナウンサーは勇躍博多へ乗りこんだ。

後発局の悲しさ、ネットワークが組めず単独で自社制作せざるを得ない。地元のRKB毎日放送を拝み倒して放送席を確保して頂き、中継機材とミキサー一名を借用、さらにRKB毎日の東京支社までの打ち合わせ線も借りてようやく

中継にこぎつけた。放送席はネット裏正面、前から5列目という最高の席であったので迫力満点、声の大きいことでは定評のある窪田アナも力強いアナウンスで初のナイター中継に臨んだ。

予定通りに始まった。心地よい初夏の夕暮れの筈が、夕風と熱気に包まれた球場内は蒸し風呂のような暑さ。汗かきの窪田君は額からの汗を拭うのに大忙し、ところが第一試合が延長戦になったため、放送はその途中からになった。

悲劇はここから始



平和台球場の筆者(左)と窪田アナ

まった。結局第一試合が終わったのは8時近く、第二試合は8時20分ごろ開始された。試合はなんとなくだらだらと進み、終了までかなり時間がかかりそうな気配だったが、窪田君は快調なペースで喋り続けていた。何しろ解説者なしの中継なので、間を空ける訳には行かない。そうこうしているうちに、何か喋りが怪しくなってきた。

おりしも博多どんたくの真っ最中、祭り気分には浮かれるファンが平和台球場へ続々と押し寄せ、内外野とも膨れ上がるほどの超満員の中、ダブルヘッド第一試合は

オンエアの送り返しをモニターしていた私の耳に本社から連絡が入り、「どうも怪しい、バッターの名前を間違えたり、打球の行方

が何処だかわからない、投球カウントやアウトカウントも間違っているのでスコアがつけられない、一体どうしたんだ！」

勿論窪田君の隣で指示を出している私とて、気がつかないは筈がない。口では言えないので間違うたびにメモを渡して注意したのだが、どうしても直らない、ふと窪田君を見ると顔面蒼白、額には冷や汗と思われる汗が吹き出しているではないか。すると窪田君は股間を指したり、水を飲む仕草をしたりしている。これはのどが渴いているのだと早合点した私は「水かジュース持って来るからちよつとの間一人で喋っていてくれ」とメモを渡し放送席を離れた。実は私も大分前から小便がしたくてまいていたのだが、とにかく水を持ってこなくてはというほうが先で、売店を探しに階段を駆け登った。すでに売り子は全部引き上げてしまっていない。観客席最上段の売店にやっと辿りついてジュースを買おうとしたが生憎売り切れ、仕方がないので売店のおばさんに頼んでビール用の紙コップに水を入れてもらい、脱兎の如く放送席に戻った。水の一杯入った紙コッ

プを窪田君の前に差し出すと、彼は手を振って、そうではないという仕草、やおらそのコップを持つや足元に流してしまった。そして額の汗を拭いていたハンカチを股間に広げて何やらゴソゴソ、ハンカチの下に空になった紙コップをあてがってたまりたまった小便を出したらしい。驚いたのはそればかりではない。一杯になったコップを私に見せるやこれを再び足元に流し、もう一度ハンカチの下に：結局コップ二杯も溜まっていたのだから、さぞ苦しかったことだろう。これを知っているのは当の二人のみ、隣のミキサーも傍らのお客も誰も気がつかず、放送席の前のお客は足元に流れてきたのはビールかジュースだろうぐらいにしか思っていないかったのではないか。

それにしても窪田君は二杯も出したが、その間絶え間なく喋り続けるという離れ業をやったのけた。これは誰にでも出来ることではない。アナウンサー根性を存分に発揮した武勇伝として後々語り継がれた伝説の真相である。後日窪田君と私の二人は若宮編成局長から生理現象の苦痛に耐えながら

ナイター中継を完遂したことは称賛に値するということで表彰され金一封を頂いたが、なんとも珍しい表彰であった。

◆初の日覧試合、

長嶋サヨナラホームー

昭和34年6月25日、後樂園球場に天皇皇后両陛下をお迎えして、巨人・阪神戦が行われた。

試合は追いつ追われつの大熱戦、同点で迎えた9回裏、先頭打者長嶋選手は阪神村山投手の5球目の速球を左翼スタンドに叩きこみ、劇的な幕切れという後世に残る名勝負となった。当時は試合終了後



天覧試合でサヨナラホームランを放った長嶋選手にインタビューする大林アナ

のヒーローインタビューは早い者勝ち、かつて「タックルの松」と

異名をとった私から、一番早くヒーローを捕まえる秘策を聞いていた運動部の鳥居君と大林アナウンサーは、試合が終わるやいなや、巨人軍ダッグアウトの屋根から飛び降り、興奮して戻ってきた長嶋選手を真っ先にキャッチ天覧試合という晴れの舞台で代表インタビューをするようになった。長嶋選手は貴賓席の両陛下に向かってインタビューを受けていたが、両陛下は席から身を乗り出してお喜びになっていたのがとても印象的であった。

またこの日は、その年の巨人軍に入ったルーキー王貞治選手もホームランを放ち、これがONアベックホームランの第1号になった記念すべき日となった。そのほかにも悔し涙でマウンドを降りていった阪神村山投手と長嶋選手が宿命のライバルとして、長く対決してゆくドラマの幕開けでもあった。

◆ナイター中継珍談集

★東映フライヤーズは駒沢球場を本拠地としていたが、夏は蚊が発生して放送席の我々を悩ませた。球団ではその対策として、蚊を退治するために試合中に殺虫剤を散

布してくれるのは有り難かったが、アナウンサーは鼻をつく匂いで咳き込んだり咽たりと散々、更にズボンの中にまで入り込んで刺されるので痒くてたまらず、アナウンスも途切れがちになる程。

「ピッチャー第何球を投げました(ピシヤリ)」：打ちました(ピシヤリ)」：というわけで落ち着いて放送も出来ないという始末、時には現場でCMを読む女子アナを連れて行くのだが、ストッキングの上から刺されて、試合が終わって見たら蚊に食われた跡だらけという悲劇もあった。

★駒沢球場の放送席は各局の仕切りが幅の狭い板一枚、従って隣の局のアナウンサーの声が筒抜け、そこへ3局も4局も並んで中継するので、我々のマイクに他局の声がみんな入ってしまう。

声の大きさでは中途半端でない窪田(RF) 吉川(TBS) 細田(QR) 竹野(LF) 明海(短波)など、民放大声五強といわれるそうそうたるスポーツアナが勢揃いしようものならこの放送だから分らないほどの大競演となる。お互い負けてたまるかとばかりにますます大声を張り上げるので、さぞ

うるさくて迷惑だったのではかろうか。

★中日球場では観客席の中の特設放送席で中継していたが、ラジオ関東の放送なのでどうしても巨人中心の内容になる。

あるとき、我々のすぐ横にいたお客さんが頭に来て、「お前らここをどこだと思ってるんだ、名古屋に来て中日の悪口をいうのはけしからん」と手にしていた一升瓶を叩き割り、解説の飯島滋弥さんの顎につきつけたのにはまいった。すぐさま係員が駆けつけてくれたので事なきを得た。私も、これは関東向けの放送だからといって宥めたが、大きな声が出せないのほとんど効き目はなかったようだ。

★アナウンサー、解説者も時として珍語を口にすることがある。

「こう淡々としているのは不気味悪いですね」ブルペンではリリーフピッチャーも用意まんたん(万端)整っているの…(K解説者)「ここでないや(一矢 報いたい)」(O解説者)

今にも雨が降りそうな空模様の時のイントロアナウンスで「雨が期待される後楽園球場…」雨の中の試合で「黒い白球が転々とセン

ターへ…」(Kアナ)つい勘違いして「打ちました」ファースト、ベースを捕ってボールにタッチ…アウト」(Sアナ)



後楽園球場のラジオ関東の Gondola 放送席

今や民放ラジオはナイター中継真つ盛り、しかし今日の隆盛を築き上げたラジオ関東の功績は見逃すわけにはいかない。私も微力ながらその一翼を担ったのだという誇りが生き甲斐にもなっている。

ON時代の幕開け、ジャイアンツ9連覇、王貞治、世界のホームランキングに等々。数々の名勝負を足跡として刻みながら、ラジオ関東ナイターは連綿として続いている。

時移り、人は代わり、社名も変わったが、誰かさんの言葉ではないが『ラジオ関東のナイターは、永遠に不滅です』

写真提供

RFラジオ日本

この原稿は平成10年5月発行の関東民放クラブ会報44号に掲載したもののを再録したものです。

筆者の松澤壽男さんは寄稿直後の平成10年に故人となりました。(編集委員会)

◆ラジオ関東のナイターは

永遠に不滅

昭和34年にスタートしたラジオ関東のナイター中継は、RFラジオ日本となった現在まで39年の歴史を積み重ねている。